

# くう 空からくるエネルギーとは何か

秋 山 幹 男<sup>1</sup>

## What is The Energy that comes from The “kuu” ?

Mikio AKIYAMA

宇宙物理学の世界では、真空中にエネルギーがあると考え、大きな理論的展開をみせてきたという。これを2002年の論文で取り上げ、この仮説に触れたことによって「似よることとズレること」に基づく理論構築はさらに発展させることができたのである。

この度は、人生の第③段階に達した成人期・成熟期の人の目指すべき方向性についての研究を、似より感の研究から切り離し、単独に、新しい方法でまとめようと考えた。本論文は、その様式を決める上でもその模索の第一歩とさせたい。老年期をどう迎えたらいいいのか、科学の解釈では解決し得ない「私の死」というテーマにどう挑戦できるかについて、試行錯誤しながら旗揚げしてみた。最初の挑戦としては、西洋から誕生した心理学ではあるが、東洋的・日本的なアプローチをもとにしながらその歩みを始めることにする。

### I 仏教伝来についての外観

まずは、菅原（2003）の「ブッダの歩いたインドーイラストで読む仏跡巡礼」を読み、2500年前のブッダの足跡を頭に入れた。次に、山折・大村（2001）の「ブッダの教え」からその後の伝播を辿ってみた。北伝仏教の一つは、中国大陸で新しい「言葉の仏教」に加工されていく。これは朝鮮や日本に伝わった。もう一つは、ヒマラヤを越えチベット高地に登攀する。それがチベット仏教である。インドで発達した密教はすでにヒンドウ教の影響を色濃く受けていたようで、その流れがチベット仏教を染め上げていったと山折は言う。そこではセックスの万華鏡がきらめくような花を咲かせる。チベット高原は大気が極度に薄い。その一種の酸欠状態のなかで深層の欲望が意識の表層をつき破って浮上するのだろうかという考察には興味が湧く。それは、トランスパーソナル心理学が考えてきている変性意識状態と関係づけてのことである。また、チベット仏教のもう一つの特徴として、そのマンダラ密教図に猛獣が登場することを上げている。狩猟文化の影響が形に表れているとみているのである（例、捨身飼虎）。ブッダの教えは、南方にも伝わりそれは上座仏教と言われている。ここではシャカ信仰と三宝への帰依を大切に。ひたすら厳格な戒律を守り、出家主義をつらぬく特徴をもち、小乗仏教と呼ばれたこともある。

---

<sup>1</sup> 広島文教女子大学人間科学部心理学科

## Ⅱ インドの人生観：四つの人生段階

インドでは、死に至るまでの人生を四つのステージに分けている。ヒンドゥー教徒の生活規範を示す『マヌ法典』によるのだそうであるが、学生期、家住期、林住期、遊行期である。この第3・4期に注目したい。心理学は、科学的に人間や心<sup>がくしゅう</sup>を解釈しようとして努力を重ね、たとえばエリクソン、E.H.のようなライフサイクル理論が構築されてきた。しかし、欧米社会だけでなく日本社会においても成人期以後の生活についてのライフプランが動揺をきたしている。定年後の生活設計は、各自に任された形で一見民主的であるように思われるのだが、その実態は見通しもたない、いわば、野放し状態といってもいいのではあるまいか。

心理学は、本腰を入れて老後の人生設計についていかにあるべきかを真剣に追究せねばなるまい。その解決の一つは、欧米重視の捉え方ではない別の接近方法を取ることも大切ではなかろうか。心を深く見詰め続けてきた東洋の2500年の歴史は、たかだか数百年にしかない現代の科学的解釈を上回る知的財産を蓄積してきているはずである。

「林住期」は、仕事や子育てが一段落したあと、ひとり旅にでて、好きなことをするという時期である。森に入って瞑想するもよし、楽器片手に辻音楽師の生活を楽しむもよし、聖地巡礼などで自己を開発する時間をもつもよしなのである。「遊行期」は、聖者の道を行くステージである。林住期に至る者の多くは心身の疲労を感じたり、路銀を使い果たせば、また家族のもとに帰っていく。そのような林住期を生きる者たちのなかから、ほんのわずかな人間たちだけがつぎの遊行期に入っていく。その段階に入った人間はもはや家や共同体にもどらない。旅から旅への遍歴のなかで、悩める者たちの魂の看取りをする。聖者の一筋道である。…第三林住期は、聖と俗の境界領域に位置づけられる。たんなる世俗でもたんなる聖でもない。俗にあらず聖にあらずである。俗と聖の時間のあいだを往復する自由なモラトリアム期間といってもいい。聖者になるためのウオーミングアップ、あるいはリフレッシュした心身を発見してふたたび世俗に復帰するまでの猶予期間である。

(山折・大村 2001 P.104～106より)

この段階は、村瀬(1984)の言う“さらなる「成熟」をめざすプロセス”に入った人たちの生活と呼んでもいいのではないだろうか。聖と俗の二つの世界に開かれた人生のステージである。日本の社会では、この二つの世界の往復を大多数の人が忘れ去っているように思う。自然性と共同性のバランスの取り方について、日本型教育はまだ未完成と言っても過言ではあるまい。

## Ⅲ ダライ・ラマ14世とジャン＝クロード・カリエールの対話より

この度の初めての研究は、1994年に出版され2000年に新谷淳一が訳した「ダライ・ラマが語る」をもとに論を進めてみたい。1935年生まれのダライ・ラマに、1931年生まれのフランス人カリエールがインタビューした対話集である。ダライ・ラマの仏教は、チベット仏教が土台である。ここで

紹介するのは、2003年6月に熟読しメモを取ったものである。今年度の紀要論文（2003）に取り込むにはそのスペースがなく、今回再度熟考し改めてまとめ直してみた。新しい記載の仕方はまだ未完成の段階なので、抜き出し手法的に仕上げている。ビッグな人生の大先輩の対話を大切に、そして尊重しながら「空からくるエネルギーとは何か」というテーマのもとに思考の流れを創り上げてみた。挿入文の右端の数字は訳本のページである。

## 1 すべてのものは相対的なものである

仏教は何よりもまず事実を大事にします。仏教は一つの経験、それも個人的な経験なのです。

30

動揺と平穏を行き来する、、、動揺が生んだものを平穏がふるいにかける。…本当のところは、一人一人に自分に合った環境やリズムがあり、絶対的な規則などありません。

32

《悟り》それ自体は、そもそも人から教われないものだが、そこにいたるための道は示す必要がある。

40

まずここでは、対話の背景にある仏教の考え方が科学的な手法とそんなに違わないという、二人の共通認識があることを紹介しておきたい。

人間もふくめて、どんな生きものでも世界の外、宇宙の輪の外には出られません。私たちはこの輪の一つの部分なのです。…その輪は今、ますます激しく軋んでいます。

43

万物が絶えまなく変化し流転する。…《原子を構成する粒子》は絶えず動いているという事実があるのです。

57

すべては相対的なのです。

58

西洋において誕生した心理学を42年間学び研究してきた者にとって、「自己」は既成事実であると考え続けてきた。その結果手にしたのは、「自分の死」ということに対する不安と恐れであった。自己という存在者は絶対ではないという捉え方は、禅の十牛図における第8～10図に該当するのではあるまいか。これからはさらに、密教の考え方を空海や司馬遼太郎から学び取っていききたいものである。

人間の心を孤独から解きはなち、宇宙全体とのつながりを取りもどさなくてはなりません。そうしなくては、本当に人間は破滅します。つながりを持たないために破滅するのです。

63

今の人間は、波立った海面だけを見て、その下で人間を支えている安らぎを知らないのです。

72～73

たとえ、世界と人間についての私たちの知識が幻であっても、《生まれていないもの》や《成していないもの》も存在するのです。それらがなくては、私たちが存在できません。ただし、

私たちの存在のしかたは、(心の活動に左右される) 相対的なものであり、同時に、(ほかのあらゆる事物によって) 条件づけられています。 89

人間の存在は、いかなる意味でも独立したものではありません。しかし、それ自体で欠けるところのない一個の存在なのです。 89～90

人間は世界の部分ではありません。一人一人が世界そのものなのです。 90

変わらないのは、人間と世界の関係だとダライ・ラマは言う。ここには、早坂泰次郎の「関係性」がさらにスケールを大きくして取り上げられているように思われる。すべてが相対的なのであるという考え方は、途轍もなく大きな意味を秘めていることが分かる。

宇宙の根源的な力の一つは、「核力」が宿っているということである。 131

仏陀は「最も微細な原子の中央に宿る」という一節がある。… 大昔の人間のたしかな直観は、現代科学の見方と近い場合がある。 132

東洋ではつねに、限界を持たず、いたるところに広がっていくものとして宇宙を捉えていた。 133

この話を聞きながらカリエールは、仏教と同じように最新の科学も、究極的には空虚に到達するという宇宙物理学の考え方と結びつけていく。続けて“仏教は、一つの科学ではないでしょうか?”と問い、ダライ・ラマは「まさしくそのとおりです」と答える。ただし、《見る》ことは絶対必要であるが、《近くで見よう》とすればかならず混乱が生ずるとも述べるのである。

## 2 心とは

一人の人間の心が心の全体像を捉えることはできないのである。 136

心に関するもう一つ厄介な要因 … 人間の心は本来コントロールしがたい。

心それ自体は内在的な特徴を持たない。感覚によって歪んだ影響を受けはするが、心自体は鏡のように前にあるものを映すだけなのだ。…、心には固有の一貫した特性がなく、心の特性を決定しようとしても無理なのである。結局のところ、心の働きだけが真の創造主の役割を果たすのかもしれない。だからこそ、心について考えずに先に進むことはできない。…、幻をぬぐいさるためには、心の働きを考察する必要がある。 138

心が生みだす現象が把握しがたいもう一つの理由は、今日では無意識と呼ばれる神秘的な領域が心のなかにあることである。仏陀自身が、当初からこの驚くべき不可思議な領域を発見し、アムシャヤと名づけた。 138

シャカムニの「アムシャヤ」の定義：依存心と悪意に傾きがちな心の隠された傾向

ヨーロッパで19世紀末にフロイドが科学的に主張した「無意識」は、東洋においてはシャカムニ

以後も長い年月をかけて推敲されてきていることがよく分かる。それにしても、心理学が行動科学をめざす学問であると定義して追究した成果と比べ、2500年かけて練り上げられた仏教の『心』には随分と差をつけられているように感じている。

## 2-1 心の安らぎ

心の安らぎは、ゼロからつくりあげるのではなく、発見すべきなのである。心の安らぎを発見すると同時に、本当の知への道も発見できるはずだ。 148

この安らぎを一つの事実と捉えて生かすならば、人類は今以上の可能性を持てるでしょう。とにかく、まず第一に心の安らぎがあることを認め、それに到達し、維持しなくてはなりません。… これは意見ではなく事実なのです。 149

心を平静に保つようにといつも教えるのです。…瞑想すれば、自分のなかに寛容の心を発見できるはずです。 157

すべては、私たちの内面から、一人一人から発します。その場合、心の安らぎと慈悲は不可欠です。…探す努力さえいとわなければ、かならず自分のなかに見つかります。

— 自分のなかにある慈悲と心の安らぎ — 116

菩薩は、光に包まれた究極の安らぎであるニルヴァーナに到達できる力をもちながらも、それを拒否し、むしろ、苦しみに満ちた現実の世界と接触を保ち救済しようと望みます。言い換えれば、世界に苦しみが少しでもあるかぎり、真の安らぎに到達できないのが菩薩なのです。 160

人間は自分のなかに菩薩を生みだすべきなのです。…強力な自我を持たなくては、このように決意できないのです。菩薩は、自分の身を危険にさらし、一緒に《地獄に堕ちる》危険をおかしてでも、人を救おうとします。 161

なぜ、仏教では菩薩という存在を考えだしたのだろうか。林住期から遊行期に達した遠い先祖たち・先人たちは、何を思い描き菩薩に救いを求めようとしたのだろうか。人間の作り上げてきた2500年の心の流れは、人間の心に潜む欲望や悲しみそして希望・夢等との対峙だったのだろうか。自然との、社会との、異文化とのそして何よりも自分とのかかわりについての、…。

## 2-2 仏性

仏陀の性質は〔仏性〕。それ自体は、人間一人一人のなか、あらゆる生きもののなか、さらには、一つ一つの原子のなかにさえ宿っている。仏性は、人間が積みかさねる不純な行為によって隠されることはあっても、壊されはしない。 165

素粒子は、植物か動物かそれ以外かは問わず、別の個体の一部となり、今度はその個体がいわゆる死を経験するのである。…脳が停止すれば、人間の心や意識は完全に死ぬとしても、人間

を構成する根源的な物質は不滅なのである。 171

ニルヴァーナは、仏教できわめて強固に確立されている縁起という考えの彼方にあり、何によっても生みだされず、至高の真理としてただそこにあるのである。、、、そもそも仏陀は、ニルヴァーナについてほとんど語りませんでした。たしかに、転生のサイクル、つまり輪廻からの解放は示唆しましたが、それ以上は説明しなかったのです。だからこそ無数の解釈が生まれたのです。ニルヴァーナとは何かと聞かれたら、心のある種の質と私は答えます。 178

幻から抜けだし、心の汚染を浄化する必要があります。浄化して目覚めることにより、人間の心はニルヴァーナと呼ばれる高い質に到達できるのです。 179

仏性が一つ一つの原子のなかにさえ宿っているという考えは、横山（1987）より学ぶことができる。人間を構成する根源的な物質は不滅であるというのは、素粒子のレベルでは固定した存在はないとか、その有無を問えないということとは違った解釈の上にできあがった心の創造物なのだろうか。ブッダはニルヴァーナについてほとんど語らなかつたのに対し、ダライ・ラマは心のある種の質と言う。この仮説構成体がいかなるものなのかについてはまだよくは分からない。

心を浄化する一番大事な道具は、心そのものです。、、、心の働きに気をつかい、多少でも注意を払えば、心の重要さに気づいて驚くはずです。心は、あらゆることがらの中心にあります。

180

“心のコントロールも、心の仕事なのですね？”「心以外の何にそれができるのでしょうか？心は、心そのものを絶えず創造するのです。だからこそ、心が持つ責任という大きな問題が生じるのです」、、、“もし、心それ自体の創造主だと心が認め、その力を働かせるならば、当然、他人に対する人間の態度も変わるはずですね？”ダライ・ラマは私を見つめ、重々しくこう答えた。「目的はそれなのです。それだけが目的なのです」 181

心は、心そのものを絶えず創造する。心という目には捉えることのできないもの、しかし人間が思考を開始してからずっとこの心は、離れることなくわれわれが見つめ続けてきているものである。その正体はいまだ完全には把握しきれていないのではないか。修行の道を歩み続けてきた50歳代のダライ・ラマは、すでに体得された悟りの人なのであろうか、、、。

### 3 微細な心について

原因と結果のはてしない連鎖を解明するのはほとんど不可能ですが、連鎖はたしかに存在するのです。 190

自分は絶えず解体し編成される無常なものにすぎず、独立した個人としては存在しない。つまりは、世界の全体と結びついている。 191

カリエールは、「柔軟で柔らかな仏教の考え方は、変化する世界にぴったりと適合するように思う。そもそも仏教は、世界は無常だと断言し変化に身をゆだねるのだから」と述べている。

仏教は一貫して、物質も心も常住ではなく、すべては絶えず解体し再編成され続ける。とりわけ、西洋で非常に重んじられる《自己》も、風のひと吹き、幻、けっして見つけられない束の間の現象だと説きます。 236

人の心は、《微細な心》と呼ばれるレベルに到達すると、もはや普通の意味での死を迎えることはなく、ほかの身体に化身できるのです。 237

人間は今ここにいて、まわりに広がる宇宙を見て、その宇宙は無限に広がっていると考えます。……、そもそも、ビッグ・バンがどのように起こったか、どうして起こったかは、誰も答えられません。仏教では、あらゆる出来事には原因があり、宇宙の全体が無常と輪廻に支配されていると考えます。どんなに昔の出来事でも、必ず原因があるはずです。 241

“その物質の状態の前には何があったのですか？”「人間にはわからないというのが宇宙物理学者の答えです。ビッグ・バンは、宇宙の歴史を人間が解釈するための出発点なのです。宇宙についての人間の解釈の始まりなのです。…、しかし、何かが存在しはじめる前にあったという何かを、そもそも創造できるでしょうか？」 242

この会話をもとにカリエールは、次のように述べている。

現在学者たちは、《暗黒物質》や《ミッシング・マス》と普通呼ばれる、まったく別種の物質が存在すると確信している。この物質は、人間にはまったく謎である。通常物質とは異なり、粒子や原子で構成されていないらしく、原子核も持たないため、人間はこの物質を観察したり研究できないのである。…、それにもかかわらず、この物質の存在は、天体がこの物質から重力を受けていることで確認される。しかも、宇宙ではむしろこの物質の方が《主流》らしいのだ。原子核を持った普通の物質より8～10倍も多く存在すると考える専門家もいる。この物質は、謎であるがゆえに人間を魅惑する（243～244より）。

これは、真空のエネルギーに通じるものなのであろうか。今のところそのように押さえておきたい。

仏教の宇宙は無数の世界からなる。… 循環と反復を基盤とした宇宙観

シャカムニその人は、《不可知なものに思考の糸》を垂らすべきではないと、あらかじめ注意を促し、基本となる態度を示したのである。宇宙は永遠かという問い、つまり、宇宙の起源についての問いも、《説明されない見解》の一つと考える。…、あらゆることがらを知ったとしても、聖人への道、安らぎの道を先に進めるわけではない。沈黙だけが、正しい答えなのである。 245

何らかの生きものが、あるとき、この宇宙が存在することに歓喜したのだ。だからこそ宇宙は存在するのです。 246

粗大なレベルの心は、身体がなくなると同時に消える。

最も高いレベルである《微細な心》、《微細な意識》のレベルまで高められるのです。だれもが知っているように、概念による思考には限界があります。だからこそ、仏教ではない、《直接の道》と言うべき困難な知の道を進もうとするのです。...この道の最後には、悟りが待っているのです。

246

高史明 (1999) は、いのちの輝きという章でタゴールの言葉を引用している。

小さい真理は明瞭な言葉をもっているが、大きな真理は大きな沈黙をもっている。

タゴール著作集 (藤原定訳) より

東洋の叡智は、本当に奥が深いと思うのである。

心は心以外のものから生まれはしないのですから、微細な心に始まりはありません。微細な心のはっきりあらわれれば、物質の捉え方自体がまったく変わり、始まりという考えさえなくなるのです。

247

カリエールは、「微細な心と化身と世界の起源の三つの考えには、おたがいつながりがあるはずだが、私には謎のままである」と言う。同感である。

“どうして圧倒的多数の人間は、前世を少しも記憶していないのですか？”「それはこういうことです。死の瞬間に、現世と来世のあいだにある意識のレベルが、より微細なものになります。現世の記憶は、この微細なレベルに宿って来世へ移行するのです。しかし、弱さや、訓練や集中力の不足から、大部分の人間は、粗大なレベル、意識的な心のレベルにとどまるのです」...微細な意識は、人間が意識を持ち始めることそのものと結びついていて、ほかのレベルの意識が消えているときでもつねに存在します。...“つまり、けっして破壊されないのですか？”「ある意味ではそうです。だからこそ、微細な意識が化身するのです。ビッグ・バン、つまり世界の起源に話をもどすなら、比類ない力を持つこの微細な心が、原初の創造の原理だったとも考えられます」

249

仏陀は微細な心の具現だったのです。

250

人間の意識は絶えず変化し続けます。不易なものは何もなく、何かが伝わる時には、かならず大きな変化がともなうのです。

252

心には、人間の身体という物質的なかたち、遺伝の法則によって両親から受けつぎ、おそらく染色体に支配されるかたちが必要なのです。心とは、身体という物質に宿る、微細で捉えがたいエネルギーなのです。...一番高いレベルの心はけっして消滅しません。そのレベルの心はけっして消滅しません。そのレベルの心は、智慧のようなもの、空間も時間も飛びこえる、内面の師、最高の導師なのです。

255



微細な心はたしかに存在し、それこそが創造と言われるものすべての源であると私たちは信じています。人間は一人一人のなかに、時間の始まりから仏陀の境地に到達するまで、この微細な心は存在し続けます。私たちが《存在》というのは、まさしくこの微細な心なのです。 258

微細な心は、膨大な時間のあいだ、かたちを変えつつ仏陀の境地を求め続けます。この心が、ある人間のなかで最高の質に達すると次のかたちを選ぶ、これが化身なのです。…、仏教はすみからすみまで、心に対する信頼についての銘なのです。仏教は、心を無と捉えないように努めるあまり、まさに世界を超越してしまったのです。 258～259

息切れを起こしかけながらも、何とかこの対話の論理についていこうとしている自分が今ここに存在している。一番高いレベルの心である微細な心は、心が創造した心の智慧であろう。しかし、この心でもって宇宙・自然・世界・社会・人間関係のすべてを説明し尽くすことはできるものなのだろうか。ダライ・ラマのこの主張を現在の心理学者たちはどれくらい受け入れられるであろうか。また、トランスパーソナル心理学の泰斗であるウィルバー、K. (1996) ならば、どう解説してくれるだろうか。

#### 4 空(くう)とは

如[tathata]は、《あるがままなこと》を意味する。…、この《あるがままなこと》は、単純化の極みである。高い質に達した心は心自体を忘れ、個々の存在は、それ自体ともそれ以外の事物とも完全に一体となる。心は、あるがままに心そのものであり、世界の全体と、反省も疑いも距離もなく一体化する。この一体化はごく自然に行われるので、それに達した者自身が気づかない場合さえある。 259

密教の最も洗練された(そして最も難解な)教えによるならば、無意味な重荷から完全に自由になった心は、世界そのものと、人間がそこから得る知覚のなかに、あらゆる真実を見る。…、すべてはここにある。私たちは、見えるものそのままを純粹に探求し、むき出しになり、真の姿をあらわにする現象—あらゆる真理はそこにある—を見るように努めるべきである。 261

仏教思想の師たちも当然考えた問題が一つ残っている。心それ自体も、結局のところ最高度の幻ではないのか?…、光明と空(くう)がともに生まれ、最後には融合する秘密の領域を、仏教は夢想するのである。 262

ワロン、H. の〈内なる他者〉を手掛かりにして〈私〉を理解しようとした西平(1986)は、次のように述べている。

〈私〉は、〈関係において〉と同時に〈プロセスとして〉理解されうるものである。

〈私〉は、つねに可能性として存在しているのである。

〈私〉の在り方は、〈私〉それ自身の中に隙間があり、ズレがあるのでなくてはならない。

ピアジェ、J. とワロンは、発達心理学の分野で多大なる貢献を成した学者であるが、ダライ・

ラマの心境（仏教の真髄）に到達できていたのであろうか。もしもそうであるならば素晴らしいことではあるが、そこまでは、、、という気もする。また、ワロンの考え方をベースにして〈私〉について沈黙思考を重ねた西平が、ここまで見込んで切り込んでいたとしたならば、それは大きな熟慮であろう。たとえ本人の深層から呼び覚まされたものであったとしても。

ダライ・ラマはまず、空は科学的概念だと答える。私たちは空なのです。人間を構成する物質は、いわば空なのです。 265

そもそも《空》という言葉は《無》を意味するのではないと、はっきり言っておく必要があります。、、、人間がその部分をなす世界は、それ自体で存在するのではなく、衆生の集合でもなく、一つの流動体なのです。さまざまな状態の流れなのです。だからといって、世界が無だということにはなりません。 266

現代科学は、現象そのものより、現象同士の関係に重点を置くことが多いのです。、、、仏教ではこういう言い方をします。事物は、それが受けるあらゆる影響によって、たえることなく出現し、存在し、消滅する（絶えまない波のように）。 266

たとえ複雑でも、そのビジョンをそのまま受けいれて、それに到達しようと努めないかぎり、私たちは幻から抜けだせません。もし、一つ一つの生きものや事物が独立した存在だとすれば、それ以外のどんな要因からも影響を受けないはずですし、あなたがおっしゃる関係もないはずで。しかし、そのような影響というか関係は、いつでも、さまざまなかたちで存在するわけです。、、、“つまり《空》というのは、独立した存在ではないということなのですね？”「そのとおりです。形は独立したものではなく、ほかのものと分けられないのだから、《空》なのです。形とは、多くのほかの要因に依存する相対的な現実なのです」 268

“では、なぜ空は形のですか？”「なぜなら、あらゆる形は、独立して存在するものが何もない状態、つまり空のなかで生まれるからです。空はまさしく形へと導くためのものであり、それ以外の何者でもありません。形のない空には意味がないのです」、、、かくして、一枚の紙は空であり、空はすなわち充溢、つまり、宇宙全体を孕んでいるのです。 268

いよいよ空（くう）の登場である。空からくるエネルギー・力とは何を意味しているのだろうか。意識対無意識、表層対深層、言語対イメージ、こころ対魂、個人無意識と普遍無意識、フランクフルト、V.E.の精神的無意識・自己根底のいのちの働きなどの概念で捉えようとしてきた心理学の科学的接近は、この空からくるエネルギーなるものを見つめているのだろうか。《見る》ことは絶対だが、《近くで見よう》とすればかならず混乱が生じると言う。無ではなく、空なのである。その存在を言葉で示すことはできにくい仮説構成体なのである。禅の老師内山興正は、「頭の思いとナマの命（いのち）」を使い分けた。道元よりさらに500年前に活躍した空海は、自然とのかかわりのなかから何を悟れたのであろうか。

金剛乗，つまり密教の伝統では，絶対的な現実と相対的な現実の区別，《生まれていないもの》と《生まれたもの》の区別までが消滅する。《本質》と《実存》の区別とっていいだろう。乗りこえられない決定的な真理が，《純粋なビジョン》と呼ばれるテクニックによって，感覚の世界で私たちに与えられる。この真理はすなわち，《あるがままなこと》，自明性そのものである。現象はもはや現象ではなく，無明とか分別さえ問題とならない。すべてがこの高次の知覚によって与えられ，彼方に何かを求める必要もない。

輝かしい統一が全体を覆い，そのとき空と光明は一体となる。

268～269

カリエールは，次のようなまとめに取りかかる。

こうして私たちは，あらかじめ定められていたかのように，《潜在的な（バーチャルな）力》というデリケートな概念に到達する。量子論のレベルでの空虚は，無ではない。ある場（フィールド）がそこには存在するが，人間はそれを理解したり察知できないのだ。…人間が観察できないものなので，物質の潜在的な力に満ちていても空虚と言われるのである。

まだ潜在的な状態にある，しかるべく配置された粒子に，エネルギーが与えられさえすれば，感知できる存在となる。この際粒子の観察そのものが決定的な役割を持つ。…観察する者とされる対象の二元論がなりたたない状況にきわめて近いと言える（269～270より）。

仏教が2500年考え続けてきた《心》について，心理学を学んできた私はどう受け止めどうかわっていくべきなのだろうか。これからの心の取り組みには，多くの研究者の協力が求められていることは間違いない。

## 5 最後に，般若と呼ばれる力

言葉でできた概念の奴隷になってはいけません。…空という考えをにこやかに受け入れ，そして人間の心を信頼しましょう。…仏教は，心を心から守り，心を心の頂点に導くための膨大な数の注意事項を蓄積してきた。至高の道をたどれば，心も，悪魔も，仏陀さえも消滅する。空こそが大いなる目的なのだ。

271

ダライ・ラマは最後に言う。「一つだけ疑えないものがある。人間はみな，自分のなかに潜在的な力を秘めている。般若と呼ばれる力を，表に出しさえすればいいのだ。たとえほかのすべてを否定しても，人間が持つ，自分を高めるこの潜在力だけは否定できない」と。

「ただひたすら，その力に思いをめぐらしましょう」ダライ・ラマは私の手を取り，自分の両手でじっと握りしめる。にこやかに私を見つめる。言葉を費やしても，最後には沈黙がおとずれる。私たちの対話も最後は沈黙で終わった。カリエールの締めである。

『心とは，身体という物質に宿る，微細で捉えがたいエネルギーである』・『般若の力，すなわち自分のなかに潜む力を表にだそう。その力に思いをこめてすべてとのかかわりを大切にしよう』というメッセージを，日本の心理学は科学的に翻訳できるであろうか。臼井（1986）は，「人生は，

暮らし向きの実生活と精神の世界の二つで織りなすものである」と言う。精神の世界といっても決して難しいものではない。美しいものが美しいと受け止められ、思いやりが遍く降り注げるという心の世界である。日本人の物質的に傾きかけている心のなかに、大切なものは何かと問いかけ、一人一人の心の鏡に映し出し、今こそ再吟味し合いたい。ささやかではあるが、心理学の学びに役立たせたいと考えつつ気持ちを新たにしながら筆を置く。

## 文 献

- 秋山幹男 2002 心理学的健康と時間軸にそった自己意識—女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 37 145—163
- 秋山幹男 2003 成人における実父母との似より感—女学生をもつ母親と父親について— 広島文教女子大学紀要 38 165—182
- ダライ・ラマ14世 ジャン＝クロード・カリエール 新谷淳一訳 2000 ダライ・ラマが語る—母なる地球の子どもたちへ— 紀伊國屋書店 (La Force du Bouddhisme 1994)
- エリクソン, E.H. 仁科弥生訳 1977・1980 幼児期と社会 I・II みすず書房 (Childhood and Society 1950)
- 早坂泰次郎 1994 〈関係性〉の人間学 川島書店
- 高 史明 1999 いま「いのち」の声を聞く—自死のわが子より学びしこと— 佼成出版社
- 諸富祥彦 1997 フランクル心理学入門—どんな時にも人生には意味がある— コスモス・ライブラリー
- 村瀬 学 1984 子ども体験 大和書房
- 西平 直 1986 〈私〉をどう理解するか—H.ワロンの〈内なる他者〉を手掛かりにして— 東京大学教育学部紀要 26 197—205
- NHK 2001 NHKスペシャル「宇宙未知への大旅行 ⑧宇宙に終わりはあるのか」NHK教育 2001.11.25.
- 司馬遼太郎 1994 空海の風景 改版 上・下 中央公論新社
- 菅原 篤 2003 ブッダの歩いたインド—イラストで読む仏跡巡礼— 佼成出版社
- 白井吉見 1986 自分をつくる 筑摩書房
- 内山興正 1990 御いのち抄 柏樹社
- ウイルバー, K. 大野純一訳 1996 万物の歴史 春秋社 (A Brief History of Everything)
- 山折哲雄文 大村次郷写真 2001 ブッダの教え—仏教2500年の流れ— 集英社
- 横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社